

令和5年11月30日

須賀川市議会議長 大寺 正晃 様

須賀川市議会会派 志政会

代表 五十嵐 伸



視 察 研 修 報 告 書

先に実施した視察研修概要について、下記の通り報告いたします。

記

- 1, 期日 令和5年11月13日～11月15日
- 2, 視察
 - 1日目 長野県長野市（長野県本庁）
 - 2日目 石川県白山市
- 3, 視察内容
 - 1日目 信州農業資産の取り組みと農地保全に向けた取り組みについて
 - 2日目 スタデーターリズムガイドSDGs教育旅行と取り組みについて
- 4, 参加者 9名（下記の通り）

五十嵐 伸、佐藤 瞭二、大柿 貞夫、熊谷 勝幸、小野 裕史

古川 達也、関根 篤志、松川 勇治、深谷 勝仁
- 5, 概要 行政調査日程及び調査内容は、別紙資料添付の通り

以上



「信州農業資産の取り組み及び農地保全に向けた取り組みについて」

1, 日時 令和5年11月13日午後1時30分より

2, 視察地説明者 農政部農業技術課 企画幹兼環境農業係長 白石 順一

同上 農地整備課 計画調査係長 北條 貴之

同上 農地・水保全係長 林 雅彦

同上 中山間農村・金融係長 宮下 直人

議会事務局総務課 主任 布施 梨花

3, 説明内容

資料添付 1-1-1:「信州の農業資産 魅力発信の取組について」

1-1-2:「信州の農業資産魅力発信事業事例集」

1-1-3:農業振興課「長野県中間年評価について」

1-1-4:農業振興課「飯田市上久堅集落協定」

1-1-5:農地整備課「多面的機能支払い制度について」

1-1-6:農業技術課「野生鳥獣被害対策について」

1-1-7:その他（長野県観光マップ、信州の土木魅力のマップ

など）【紙資料】

説明者4名の方々より、資料に基づいて説明を受けました。

4, 質疑応答

1, 信州農業資産の取組について

Q:どのようにして信州農業資産をまとめられたか伺う。

A:山に囲まれた地域であり、先人が複雑な地形条件を克服し、様々な工夫を重ね、今日の信州農業を築き上げた礎を後世に伝えるべくまとめ上げました。

Q:特に長野ならではの特徴があるか伺う。

A:自然に恵まれた地域であり農業を活かすことは十分にあると考える。

Q:今後この資産の維持継続するための維持費の考え方を伺う。

A:資産維持に向けた維持費は、協議し進める。

Q:新たな農業資産に対する追加見直しは、今後検討されるのか伺う。ま

た、現在の見直しをすることも考えられるのか伺う。

A:今のところ現状を維持する。

Q:この農業資産は、文化庁など国への登録申請は、出来得るのか伺う。

A:登録申請は考えていない。

2, 農地保全に向けた取組について

Q:地域の農地保全として草刈作業の人材不足問題があり、将来の継続不全に陥る問題をどのように解決可能か伺う。(高齢化による作業危険性、若者不在など必要な人材が確保できないことによる農地や生活環境の環境悪化の懸念)

A:長野県では、各集落単位でアンケートを行い、現状を把握しどのよう

な支援が可能か中間年評価を作成しました。現状では、多くが集落を継続し取り組む姿勢であり、県として今後も農用地の維持、及び多面的機能の確保を図る考えです。尚、高齢化・担い手不足の中の事務負担が増大していることから、事務の簡略化を要望されています。他に交付単価の増額や要件緩和等の集落や市町村から寄せられた要望等を国へ共有しています。

Q:農地、農道、法面、道路に対する草刈軽減に向けた様々な施策を伺う。(センチビートグロス野芝による軽減策など)

A:多面的直接支払い制度の中で人材を確保し継続的に草刈作業を実施している。集落の人材不足においては、広域協定による取り組みを進めている。

Q:農地保全に向け、近隣の山林の取り扱いは、どのようにされているか伺う。また、農地保全と山林との関係は、どのように取り組まれているか伺う。

A:現状、令和4年度において緩衝地帯整備として約17haの雑木等の刈り払いを実施しました。有害野生動物の侵入柵の役割を担うことを目的としています。

Q:農地を荒らす有害動物の駆除に対する解決策と農業収益に向けた環境改善の取組について伺う。

A:総合的な野生鳥獣被害対策を行うため「個体数管理」「侵入防止対策」「生息環境管理」の取り組みを行う。県では、国の鳥獣被害防止総合対策交付金を活用し、地域協議会や市町村へ支援する。

5. 所感

1－2－1（五十嵐 伸）

この取組は、山に囲まれた信州・長野県であるからこそ出来うる取組で、各地域の先人たちが、変化に富んだ気候を巧みに活かし複雑な地形条件を克服すべく工夫を重ねながら、信州農業の礎を築き、「疏水」「ため池」「棚田」が造られ、この自然を生かした農業資産を観光事業にも生かしている内容でした。信州が誇る農村景観や自然環境を PR、市観光に役立てることは、一石二鳥の取り組みであるとも考えます。

また、農地保全に向けた取組みでは、どの地域でも同じ問題を抱えているようであるが、後継者不足、リーダー的人材不足等がありなかなか大変な状況にあると考える。

今回の研修で感じたことは、もう一度各地域の良さを発掘し自然・観光・スポーツ施設等をエリアを分け、須賀川を一体感を持たせて PR できる取り組みをして行ってはどうかと考えます。

現在の須賀川市は、中心部のまちづくりは進んできているように感じるが、東西については、まだまだまちづくりが進んでいないように感じます。信州の

農業資産まではありませんが、須賀川市も自然豊かな場所がいっぱいあります。これをどう生かすか、これからの課題と考えます。私も微力ではありますが、当局と一体となって取り組んでいきたいと思います。

1－2－2（大柿 貞夫）

信州農業資産と農地保全について、県からの見解で説明を受けました。説明の中で農業課題の話がありましたが、本市同様に農業の担い手不足が課題となっています。ただ現在は県外からの移住者による新規農業者が増えてきているとの事例の紹介がありました。長野県はアルプスに囲まれており、ため池、疎水、棚田など自然に恵まれた地形であり、すべてこれらを資産と発し県の農業資産となっております。それらの資産を観光へと結びつけるために積極的に農業資産の魅力を発信し各方面へ紹介をされています。本市の農業資産を考えると特化したものが思い浮かびませんが、魅力ある農業資産を発掘して育て行くことが将来的に大切であると思いました。

農地保全については、本市の課題と同様でのり面の草刈りや多面的機能の取組でも、活動リーダーがいなく継続が難しい状況の為に近隣の組織と合併させて継続して取組が出来るように推進していますとの説明がありましたが、本市においてもこの事例は大変参考になると思いました。

1－2－3（深谷 勝仁）

長野県における農地保全の取り組みは、高く評価されていると説明からも感

じた。その理由としては、農地の適正な利用や管理に関する規制や指導がしっかりと行われており、農地の荒廃や分断を防ぐための施策が進んでいること。また、農業者への支援や啓発活動、農地の保全や再生に向けた様々な取り組みが評価されている地域であった。

特に印象が強い取り組みとしては、地域での広域的な取り組みについてである。地域住民の高齢化により、農家戸数の減少や、後継者不足などがあげられている。そこに対して広域的に組織を展開し様々な観点での負担軽減を図ることとで、地域の長寿命化を促進、協力金や交付金などの融通が可能となるなど大きなメリットとして反響がある。

そのような取り組みから長野県は、持続可能な農業環境の維持と地域の食糧自給率の向上に向けた成果が見られていると考える。

1－2－4（松川 勇治）

信州農業資産については、それぞれの地域性を活かした農産物をブランド化し積極的にPRし、中山間地域では、棚田やため池、疏水などを観光素材として活用している。野生鳥獣被害問題についても、食材としてジビエ料理などに活用し観光素材としても魅力的な形に変え一見マイナス要因をプラスに捉える動きが感じられた。須賀川市でも市民と共にグリーンツーリズムなどを通じて農業や食の魅力を感じ、発見する必要があると考えます。

農地保全については、全国的な組織の高齢化に伴う後継者不足により、活動

する人がいないのが現状であるが、多面的機能支払事業等を活用することで、複雑な事務作業を軽減。草刈り協力隊や土木建設業者とのマッチングし人材や機材を確保、高齢化問題に対応している。須賀川市としても市民ボランティアや民間と積極的に連携し対策を講じることが急務である。

1－2－5（関根 篤志）

全般的に農業資産の魅力発信とはいうものの、「棚田文化」の発信をメインに県として、各市町村への発信方法の伝達に徹しているイメージであった。

担当者の言葉からは、あくまでも民間にやってもらう、個人にやってもらうという考えが強く、県として積極的に推進している感覚ではないと感じた。

農業団体の組織の高齢化や後継者不足、事務量の問題などは、全国の問題と共通であり、福島県とも共通しているという印象であったが、具体的に高齢化、高齢者不足の問題を解決する方策については、検討できていない状況に写った。

同じく、野生鳥獣被害対策についても、捕獲隊という組織はあるものの、構成員の高齢化と人員不足の問題は共通して把握しているものの、県としてはあくまで各市町村にお願いする姿勢のまま、数年変化していない印象であった。

市町村とは違った県のスタンスという全体像であった。

1－2－6（古川 達也）

長野県の農業資産及び農地保全への取組についてまず感じた事は、県で発行し

ているガイドブックや小冊子（「信州の農業資産魅力ガイド」や、「一度は訪れたい信州の農業資産」など）が非常に見やすく、種類も多いという事でした。農地を観光資源として活用する事が、結果、農地と農業者を守る事になり、このような取組は非常に面白いと感じました。ガイドブックによると長野県には美しい景観の棚田やため池、円筒分水行群などがあり、そちらを案内するガイドの育成、案内板の設置などにも力を入れているとの事ですが、一方で農家の減少、後継者の不足などの問題解消に向け協力金や交付金制度の取組なども行っているとの事であり非常に興味深くお話を伺う言事が出来ました。余談ではありますが、長野駅前には多くのお蕎麦屋さんがあり、味はもちろん、福島県では考えられなほどの安さとボリュームで蕎麦を提供しており、地元地域の農業による名産品を駅を降りてすぐ堪能できる事は極めて地域の農業のPRに直結する事であり、当市や福島県全体においても地元地域名産品のPRはさらに積極的に取り組むべき課題であると考えます。

1－2－7（熊谷 勝幸）

長野県においても福島県と同じような問題を抱えていると感じ取れた。農業者の高齢化や減少、担い手不足が顕著で水路の維持管理が困難な状況であり多様な参画が必要であるとの説明があった。長野県では、棚田や水路などの農業資産を観光や学びを通じて魅力を情報発信する取り組みに対する支援を行っている。須賀川市においてもSNSを上手に利用し農業資産を有効に活用して観

光や学びと結び付け交流人口の増加や農業の魅力発信に繋げていきたいと思う。

1－2－8（小野 裕史）

信州の農業資産については、目につかなかった土木の資産をまとめ上げた後、農業資産を整理した訳ですが、隠れた宝を活用した着地型観光を活かすべく取り組まれたいる点で、大変すばらしい発想が見受けられます。本市も今、地域の宝の発掘に向け進められていますので、地域を見直すべく進めていただきたいと思います。

農地保全については、地域コミュニティーを核とした地域連携の機運を高め、地域環境整備は重要であり、課題解決に向けた地域連携を実施できるよう進めるべきと考えます。特に草刈り支援隊の結成や地域の相談業務を受け入れる広域的な活動の取り組みの支援など早々に検討すべきと考えます。

1－2－9（佐藤 瞭二）

信州の農業資産については、長野県信州の地域性が生かされ、先人が築き上げられた財産であり未来に向け受け継がれるべきものと考えます。自然を生かしたもの、人間の手によって造形されたものが現存されていることは、素晴らしい資産であり、そこに暮らす人々の営みを表しています。世界の方々にも見ていただき、日本を知って頂く、その一つとして成り立つのではないかと考えます。

次の農地保全については、集落の高齢化、担い手不足が集落の継続にも影響を与え生活環境の不全になりつつあります。長野県においても様々な支援策を進めてきていました。農村型地域運営組織（農業 RMO）を推進しながら地域社会継続に向け取り組んでいることは、本市にとっても取り組むべき事例であると考えます。

6，視察風景



「白山市スタディーツーリズムガイド SDG s 教育旅行の取り組みについて」

1, 日時 令和5年11月14日午後1時30分より

2, 視察地説明者 白山市観光文化スポーツ部 次長兼観光課長 西村一美

議会事務局事務局長 楢田 紀子

3, 説明内容

資料添付2-1-1：白山市議会概要

2-1-2：白山市議会だより

2-1-3：白山市スタディーツーリズムガイド

観光課長西村一美氏より説明を受けました。

4, 質疑応答

Q：スタディーツーリズムを作り上げる上で、必要な企画・人材の確保など、どのように進めてこられたか伺う。

A：観光連盟と協議をしながら観光課が、主体となってまとめ上げました。人材については、各界各層にお声掛けして協力いただきました。

Q：どのような条件がそろえば、体験や見学など多くのツアーが取り組めるか伺う。

A：白山手取川ジオパークに認定され、自然遺産・文化遺産の宝庫であることから、様々なツアーを取り組むことが可能であったものと考えます。

Q：スタディーツーリズムとSDG s の組み合わせを考えた経緯と実際の成果は

どうであったか伺う。

A：ジオパークの理念と合致する SDG s を積極的に推進し、ジオパーク活動を中心とした SDG s 未来都市に選定されたことから、学習に適した素材に恵まれた点が進めるきっかけになりました。現状は、まだまだ知名度の点で大きく成果は上がっていませんが、今後も継続して事業を進めて参ります。

Q：今後の取組として、新たな企画を加える考えがあるか、その構想はどのようなものか伺う。

A：今まだ構想として進めていませんが、外国からの来訪者に向けた企画を進めて参りたいと考えます。

Q：この企画に携わった地域の方々の反応はどうか。また、意見や提案など次への取り組みを伺う。

A：関係者の努力により実施してきた企画であり、今後も意見や提案を受け入れながら、改善も含め取り組んでいます。

Q：交流人口への取組であるが、その環境・社会・経済への効果はどのように分析されているか伺う。

A：今のところ経済への効果の点は、考えていませんが、今後、インバンド効果について検討することも必要と考えます。

Q：白山市の地理的条件をどのように考えるべきか伺う。

A：白山市は、山、川、海、雪すなわち、命を育む水の旅に成り得る貴重な財

産であることから、ここでしか得られない経験を提供出来る事を誇りに、地震を進めて参りたいと考えます。

5, 所感

2－2－1（五十嵐 伸）

令和3年度からのスタートで、国の補助100%(10,500千円)の取組みでしたが、コロナの状況で、なかなか結果が得られていないと感じた。

白山市も自然を生かした取り組みで、子供たちを対象とした事業を展開し、ツアーは別組(観光連盟)に運営を任せている。だが、人材不足による運営の行き詰まりを感じた。スタートしたばかりで結果がまだついてこない状況と感じるが、この事業は、継続してPRしていくことが大事だと考えます。説明をいただいた観光課西村課長の話もありましたが、石川県は小松空港があり定期便として、台湾便があるため観光に力を入れていきたいとの事でした。これも国の補助事業を最大限利用していくとの話でした。どこの自治体も財政難の状況であることから、何とか実現していくためには、努力をしていく姿がうかがえました。補助金ばかり当てにしているとはよく良いと感じますが、当市においても取組む姿勢について、見習うべきこともあるのではないかと考えます。

2－2－2（大柿 貞夫）

スタディーツーリズムガイドSDGs教育旅行の取組について研修を受けてきましたが、白山市は「白山」のふもとに広がる県内最大の面積を誇る市「日本

ジオパーク」に認定され、また「白山ユネスコパーク」にも含まれており、2018年には全国でいち早く「SDG s 事業都市」と認定されています。

自然環境に恵まれた地形により、白山を源流とする手取川流域の殆どがエリアとなり古くから続く大地の活動、多様な動植物が生きる自然そしてそこで営まれた人間の暮らしといった自然遺産、文化遺産の宝庫となっています。

この事業はコロナ禍の中、観光課において検討され発案し国から交付金を受けて事業の展開をされたとの事でした。特に教育旅行を推進していく中で、旅行会社などの商談を積極的に行い各方面に教育旅行の情報発信を続けているとの説明を受けました。本市としても、特撮文化を何へどのように組合せられるかがポイントと考えます。また自然環境で何が利活用できるものかなど、そして人口交流の拡大へ繋がるような政策を考えていきたいと思っています。

2－2－3（深谷 勝仁）

白山市のスタディーツーリズムは、訪れた多くの観光客に地域の自然や文化に焦点を当てた学びの機会を提供していた。ジオパークとSDGsとの関連性があり、事業を展開するにあたり国の補助金が該当となり大きく事業展開が進んだと考えられる。

地元の歴史や地質学に触れながら、アクティブな観光体験を通じて学び、発見することが出来るプログラムが多く示されていた。様々なプログラムの提供にあっては、プログラム提供者の高齢化等も課題となっており、観光協会及び

行政と地域との連携によりプログラムの継続的提供が必要と考える。また、教育旅行として選定してもらうポイントとしては、教科書に掲載されている内容をプログラムの題材とすることが重要である。

コロナ渦の中で減少したインバウンド訪日客の取り組みについては、多言語への対応等を想定しているが、ガイドの高齢化も進んでいるため若い世代や高校生等に養成講座や白山検定を受けてもらえるような取り組みを進めていくとのこと。

今後、白山市のスタディーツーリズムを参考に、当市としても歴史や伝統等と観光交流を交えた取り組みが行えるように検討・提言につなげていきたい。

2－2－4（松川 勇治）

市町村合併により生じた地理的環境を十分に活かし、霊峰白山の麓から流れる手取川を軸としたジオパーク認定や将来を見据えた SDGs の取組は、バランスの良い相乗効果を生み出しスタディーツーリズムを通じて世代と地域を越えた文化交流を生み出している。教育旅行という観点では、観光協会や教育委員会とも協力しながら歴史文化の継承、環境問題、食や農業の魅力発見にまで波及している。PR についても、パンフレットなどを用いて旅行会社に情報提供し、ツアーの催行を促している。

須賀川市としても市民はもちろん、観光協会や学校、教育委員会などと協力し本市の魅力を発掘し総合的（文化、環境、食、農業など）かつ持続的なスタ

ディーツーリズムを催行し人と文化が循環する社会を目指すことが理想であると考えます。

2－2－5（関根 篤志）

白山市という白山が全国的知名度が高く、「観光」というイメージであったが、駅前の雰囲気や商店街の様子からすると、人口10万人とはいっても、商業の活性化という面では須賀川市と同じような問題を抱えているのではないかという印象であった。

沿岸沖の松任市を中心とするも白山までの縦長の地理的状况からも、縦断的に街を活性化することが厳しく、金沢市などの近隣市町村に挟まれ苦勞しているため、スタディツアーを柱に子供世代を中心に記憶に残る観光を目指している様子であり、現在国連の共通目標であるSDGsを絡めた話題性も取り入れている印象であった。

ただし、市外からの利用者が多く、須賀川市というムシテックワールドの事業と同じような問題を抱えているのではないかと感じた。

いずれにしても全国的に少子高齢化の問題は共通しているようである。

2－2－6（古川 達也）

白山市の取組について、まず白山市は日本三大霊山のひとつ「白山」のふもとに位置し、市域全体が「日本ジオパーク」に認定されており、そこを巡るスタディーツーリズムはあくまでも教育旅行としてとの一環であり、教科書に掲

載されている「水循環」や「浸食・運搬・堆積」を学ぶことが出来るジオ・エコ・SDGs をキーワードとした「学びの旅」であるという事、さらにはこちらの事業を展開するにあたり国の補助金が該当し、事業の展開が大きく進んだとの事で、そのお話を非常に興味深く伺う事が出来ました。こちらのプログラムは観光協会と行政、そして地域との連携で行って行くとのお話でしたが、プログラムの提供にあたってはプログラム提供者の高齢化などの問題なども懸念されているとの事でした。また、全世界から訪れる観光客に対し「スタディーツーリズム」として白山市の地域、自然、文化を学ぶ機会を提供していますが、インバウンドへの取組として多言語対応や若い世代へのガイド養成講座、白山検定などを受けてもらうよう取組を進めていくなどのお話も伺いました。当市においても空港のある市として白山市の取組を参考に今後のインバウンド対策や当市の歴史、文化、観光を PR 出来る取組を積極的に行うようさらに議論を重ねて参りたいと考えます。

2－2－7（熊谷 勝幸）

白山市は1市2町5村が合併してできた市であり、海拔0メートルから2700メートルと起伏に富んでいる。海、川、山と3つのエリアで学ぶことができる。平成22年からジオパークの活動に取り組んでおり、動画やパンフレットを作成し、人材育成にも努めたとのことで、人と環境とのつながりが大事だと実感した。教育旅行では、主に小学生で散策と体験になるが、現在は宿泊

は少なく日帰りが多いとの説明があった。須賀川市においても散策と体験はできるので教育旅行を企画できるように働き掛けて、須賀川市のブランド力向上に努めていきたいと思う。

2－2－8（小野 裕史）

今行っている白山市の学習旅行は、将来への投資であり関係人口、交流人口の増に向けた取り組みと考えます。今種をまき、将来に向け子ども達が、自分のふるさとへの理解と共感を身につけ、次の方々にバトンを渡すことが出来る、そのような社会を築く事が重要と考えます。そのために、SDGs は、時代の求めに応じるものであり、当然の取り組むべき事業と考えます。本市においても、様々な魅力発信に向け取り、大いに進めていくべきと申し上げます。

2－2－9（佐藤 瞭二）

白山市は、「日本ジオパーク」に認定され、「白山ユネスコエコパーク」にも含まれ、また、「SDG s 未来都市」に選定された、ジオ・エコ・SDG s この3つの取り組みが重なる唯一の地域であります。今回の説明において、観光庁の事業の採択により、学びの旅に最適であるとの事から、「スタディーツーリズム」が実現したと説明されました。メニューもたくさん企画され、地域の財産を大いに活用し、交流人口の増に活かされている点で、大変すばらしい取り組みと関心致しました。本市においても、地域の宝を発見し、まず、市民に関心を持っていただき、交流人口増に向けた取り組みを進めるべきと考えます。

6, 視察風景

